

稲 作

平成26年度 水稻作柄現地調査報告書

平成26年9月
一般社団法人 北海道米麦改良協会

【調査月日】 平成26年8月25日(月)～27日(水)

【調査先】

- ◎道南班：当別町・蘭越町・道南農業試験場・北斗市・厚沢部町・今金町・厚真町・長沼町・中央農業試験場（水田農業G）
- ◎道央・道北班：美唄市・新十津川町・深川市・沼田町・小平町・剣淵町・士別市・上川農業試験場・旭川市・東川町・中富良野町
（各市町のほ場は、現地奨決ほ場を中心に調査）

【参加人数】 約70名（部分参加含む）

【総合検討会】 平成26年8月27日(水) 空知農業会館 4階大会議室

本年度も標記調査の実施にあたり、道農政部・農業改良普及センター・道総研農業試験場・地区米麦改良協会等、関係機関の皆様にご協力・ご配慮をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

本調査で得られました各地区の作柄概況や総合検討会で纏められました、今後の収穫作業や次年度に向けた留意事項について、下記のとおりご報告致します。

つきましては、内容をご査収いただくとともに、今後の取り進めにあたって引き続き、ご配慮いただきたくよろしく申し上げます。



1. 各地区における作柄概況について

【道南地区】

・融雪期は遅かったものの、は種や耕起は平年よりやや早く行われ、育苗期以降は平年を上回る日照と気温が確保されたことから、平年を上回る生育進度となっている。（出

穂期で平年比早5日：渡島）

- ・また、活着は良好で分けつも旺盛であった。
- ・7月の日照時間も平年以上に確保され、冷害危険期も平年を上回る気温で推移したことから、不稔の発生は少ないことが予測されるが、8/15現在、穂数は平年をやや上回る程度（104%）となっていることを勘



案すると、作柄（収量）は平年をやや上回る程度と見込まれる。

- ・成熟期は9/15前後と予測されている。
- ・檜山管内においても、融雪や移植が順調に推移するなど、渡島管内と同様、良好に生育が推移したことから、穂数が多く、不稔は平年並み程度と見込まれる。（8/15時点の生育遅速：早5日、茎数の平年比105%程度）
- ・しかしながら、一穂粒数が少なめの傾向にあり、最終的な作柄（収量）は平年並みややや上回る程度と予測される。（今後の天候による粒の充実度によるところが大きい）
- ・檜山管内の中でも北部の方が、穂数が多いなど、比較的良好な作柄（収量）が見込まれる。
- ・は種期以降、気象条件に恵まれたことから、平年より早いペースで生育が進んでいるが、8月の多雨傾向により、ややペースダウンすることが見込まれる。（成熟期：9/15～9/20頃の見込み）
- ・病害虫については、紋枯病の発生が近年増加しているが、他の病害を含め大きな発生・被害は無く、7月にカメムシの発生が目立ったが、基幹防除以降は減少した。

【後志地区】

- ・は種期以降、平年を上回る日照時間・気温が確保されたことから生育は早く推移し、茎数も平年を上回る本数が確保されている。（8/15現在 生育遅速：早6日、茎数：平年対比115%）
- ・しかしながら、8/15以降の多雨・寡照により、成熟期に向けて生育進度はペースダウンしており、また、出穂の揃いが良くないことから、登熟のばらつきが懸念される。
- ・成熟期は早い品種では9/11頃と予想され、最盛期は9/20頃と予想される。
- ・病害虫の状況については、カメムシの発生は8月に入り少なくなり、心配は減ったが、紋枯病の発生が軽微であるが散見されている。



【日胆地区】

- ・出芽期は平年並みであったが、育苗期以降



平年を上回る生育進捗で推移し、茎数も平年を大きく上回る状況で推移している。(8/15現在生育遅速：早5日、茎数128%)

- ・出穂始から出穂揃まで日数を要したことから、穂揃いが悪く、一穂粒数も少ない傾向にある。
- ・ただし、 m^2 当たりの粒数が多く、不稔が少ない見込みであることを勘案すると、収量の期待が出来る生育状況である。

【石狩地区】

- ・融雪は平年よりやや遅れたが、は種や耕起はほぼ平年並みの時期に行われ、活着期から出穂期にかけての生育は平年より早く、順調に推移した。(8/15現在：早6日)
- ・茎数や粒数については平年よりかなり多く確保されており、不稔も平年並み程度と見込まれることから、稔実粒数も平年以上に確保されることが見込まれる。
- ・また、成苗は中苗より一週間位早く生育が進んでいる。



- ・穂揃いの悪さ（バラツキ）は石狩地区でも懸念されるところにあり、粒数が多い分、今後の粒の充実度合も懸念される。
- ・病虫害発生による被害はない状況。刈取は9/10過ぎ頃からと見込まれる。

【空知地区】

- ・南部（長沼）の概況について、育苗期間中、高温・多照で推移したことから、苗質も良好であり、移植後も引き続き、日照・気温が確保されたことから、分けつが促進され、平年以上の茎数が確保されるなど初期生育は良好であった。
- ・冷害危険期も高温・多照で推移し、出穂期も平年より6日早まるなど順調であるが、8月中旬以降の寡照・多雨により、登熟は停滞気味であり、粒の充実が懸念される。(8/15現在の生育遅速：早5日、穂数107%)
- ・稔実粒数は、主要三品種とも平年より多いと見込まれる。(30,000~32,000粒/ m^2 程)



- 度)
- ・成熟期は、ななつぼしで9/7の予測であるが、籾数が多い分、もう少し日数がかかる見込み。
 - ・病害虫は7月にカメムシの発生が多かったものの、出穂期以後は少なくなった。
(いもち病の発生もごく一部)
 - ・中部部 (美唄・新十津川) の生育についても、南部と同様の傾向であり、出穂始～揃まで日数を要したが、登熟は順調である。
(不稔は概ね平年並みと見込まれる。)
 - ・ m^2 当たりの穂数・籾数について、品種・育苗形態によって異なるが、平年より10～20%程度多くなっており、収量の期待が出来る生育状況である。
 - ・成熟期は早く出穂したもので9/5頃と見込まれる。
 - ・北部 (深川・沼田) の生育についても、茎数(穂数)・一穂粒数とも平年より多く、 m^2 当たりの稔実籾数も平年をかなり上回り、高い収量が見込まれる。(8/15現在遅速：早4日、穂数：地区・品種により異なるが、平年対比10～30%程度多い)
 - ・穂数の多いほ場では、登熟にばらつきが見られており、穂揃いが悪いこともあり、登熟進度は緩慢である。

【留萌地区】

- ・4月下旬までは平年を下回る気温であったが、出芽期以降は高温・多照で経過したことから茎数・生育遅速とも平年を上回る内容で推移している。



- ・不稔も少ない見込みであることから、平年を上回る収量が見込まれる。
- ・8/15現在の生育遅速は早4日、茎数は平年比119%となっている。

【上川地区】

- ・北部 (士別) では、育苗・移植作業が順調に進み、初期生育・活着も良好であったことから8/15時点の茎数および生育進度は平年を大きく上回った。
- ・出穂開花も順調に進んだが、8/15時点の m^2 当たり茎数は平年を下回った(平年比98%)。
- ・しかしながら、一穂籾数・稔実歩合を勘案すると、登熟が順調に進めば、平年以上の収量が期待できる生育状況である。
- ・病害虫については大きな被害、発生はなく、登熟は順調に進んできたが、8月中旬以降の日照不足により成熟期は平年並み～若干早い程度と見込まれる。(早いもので9月上旬)
- ・中部部 (比布・永山・東川) でも、融雪は遅れたものの、耕起期以降は良好に推移し、平年を上回る穂数・一穂籾数が確保されている。
- ・8/15現在の生育遅速は早4日、穂数は品種・地区で異なるが平年比3～10%程度多い。
- ・稔実籾数も品種・地区によって異なるが31,500～37,000/ m^2 程度確保されると推測される。



- ・病害虫については、いもち病・カメムシとも発生があったものの軽微であった。
- ・南部（中富良野町）でも、穂数が概ね平年以上確保（106%）されており、登熟が良好で不稔も平年より少ないことを勧奨すると、平年を上回る収量が期待される。（8/15現在の遅速は早7日）
- ・また、上川地区の調査においては、従来の奨決ほ場の他、昨年度の北海道優良米生産出荷共励会で最優秀賞を受賞した阿部氏（剣淵町）のほ場を視察させていただきました。
- ・収穫間近のほ場を視察させていただきながら、阿部氏の経営理念（基本技術の励行・土づくり・環境保全型農業）や稲わらの堆肥化、心土破碎、溝切りの実施など、良質もち米生産に向けた具体的な取組内容についてお聞きしました。



2. 総合検討会における協議事項について

- (1) 両班による調査終了後、道農政部（農業研究本部在勤）竹内上席普及指導員を座長とする総合検討会を開催し、本調査のまとめと課題整理を行いました。
- (2) 各地区の作柄状況については上記のとおりであります。全道的な傾向としては移植期以降、概ね平年以上の気温と日照が確保され、収量構成要素（穂数・稔数等）も平年を上回っている地域が多いこと、また、冷害や病害虫の発生による減収がほと



んどないことを勧奨し、昨年並み（作況105）の収量は期待できそうと総括されました。

- (3) ただし、茎数が多く、出穂に日数を要したことから穂揃いが悪い傾向にあり、例年以上に慎重な適期収穫に向けた見極め（こまめな試し刈り）を行うことが必要との見解が示されました。
- (4) 品質（食味）については、出穂期以降の積算気温が十分に確保されたため、アミロース含有率は低下することが予想され、タンパク質含有率については、葉色は濃いものの、稔実稔数が多く確保できれば良食味米の水準程度に収まることが期待できるのではないかと見解が示されました。
- (5) 今後の技術対策について、本年産米については茎数が多く、出穂時期が長引いたことなどにより、穂揃いが悪く、収穫適期の判定が難しいことから、適期を逃して品質や歩留まりの低下を招かないよう、こまめな試し刈りを行うことにより、収穫適期を見極め、品質と収量のバランスを図っていくことが第一にあげられました。
- (6) また、ほ場によっては土壤水分の確保にも留意する必要があることも示されました。

以上